

となっている。さらに「或本の歌に曰く」として出てくるものを数えると、伊豆に一首、武蔵に一首を加えることが出来る。

このように見て来るならば、国の分っている歌九〇(九二)首の中で、武蔵国の歌は九(一〇)首で、約一割ということになる。そうして上野、相模、常陸について数が多く、それだけ武蔵国の歌の比重が重いことにもなる。

さて、武蔵国の歌とはどんな作品であろうか。

三三七三 多摩川にさらすてづくりさらさらに何ぞこの児のここだかなしき

三三七四 武蔵野に占へかたやきまさでも告らぬ君が名うらに出にけり

三三七五 武蔵野のをぐきが雉立ち別れいにし宵よりせろに逢はなふよ

三三七六 恋ひしけば袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ

或本の歌に曰く

いかにして恋ひばか妹に武蔵野のうけらが花の色に出ずあらむ

三三七七 武蔵野の草はもろ向きかもかくも君がまにまに我はよりにしを

三三七八 入間道のおほやが原のいはるづら引かばぬるぬる我にな絶えそね

三三七九 わが背子をあどかもいはむ武蔵野のうけらが花の時なきものを

三三八〇 埼玉の津にをる船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね

三三八一 なつそひくうなびを指して飛ぶ鳥のいたらむとぞよ我がしたばへし

これら九(一〇)首の中、地名として出て来るものは

多摩川 1

武蔵野 5(6)

入間道	1	おほやが原	1
埼玉	1	〔うなび〕	1

で、「武蔵野」が圧倒的に多い。「うなび」は地名であるかどうか疑わしいが一応加えておこう。

武蔵国の歌にあらわれている植物としては

うけらが花 2(3)

武蔵野の草 1

いはるすら 1

となっている。「うけら」は薬用としてまた染料としても使われたものであるうし武蔵野を代表する植物である。「武蔵野の草」は「むらさき草」のことであろうが、これまた貴重な染料であった。「多摩川にさらすてづくり」の歌とともこの地方で布地の手織や機織ならびに染色の業がいかに盛んであったかを示すものであるう。三三七四に出てくる「かたやき」の占^{うら}もこの地方を特色づけるものの一つである。これらの占^{うら}ないや手織・機織・染色から考えられることはこの地方が奈良朝時代すでに支那・朝鮮からの帰化人の文化の影響を多分に受けていたであろうということである。それにアイヌ文化なども入りまじり、かなり複雑かつ高度の文化を持っていたことが想像されるし、そのことは中央の大和あたりにも早くから知られていたようである。

まず「多摩川にさらすてづくり」の歌について述べてみよう。

この歌は東歌を代表する有名な作品であり手織りの麻布を清らかな多摩の流れでさらす乙女によせる恋の思いを述べたもので、さわやかな初夏の薫風を受け樹々の緑を背景に川の流れの清冽さを皮膚に感じる、まことに胸のすくよくなすがすがしい歌である。ところで多摩川といってもその流域は広大であり、この歌のうたわれたのは主としてど

のあたりであったであろうか。

都下に調布市があるが、これは布を調^{みつぎ}として朝廷に奉った名ごりが地名として残ったものでありさらに上流に調布村、下流にも東調布町などと地名が見られる。延喜式によれば、武蔵国の手作りの生産量はきわめて多く、相模、安房・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野と競うている。これらの国名がさきに挙げた東歌にあらわれる国名とほぼ一致することから考えれば「あづま」とは「手作りの国」の別名であったのかも知れず、したがって「東歌」はある意味では手作りの際の労働歌であったかも知れない。それが、さらに歌垣において若い男女によってさかんに歌われ民謡として諸国に広まったのであろう。

さて、調布の地は武蔵の国府のあった府中の近くその東南に当り、おおむねそのあたりが手作り生産の中心地であったと考えてよいであろう。調布市にある式内社・布多(田)天神の境内には多摩川の布さらしに關係のある碑が建っている。その碑文には、

「多摩河にさらす調布^{てうふ}さらしにとよみ給ひしは此布多の里にぞありける。よりて此所に布田の神社おはしましける。今玉川のほとりにふるき御社の跡有て、そのかみ布さらせし里人のまつり奉りし御神なるに、いつのころよりや此わたりにはうつし奉りけむしらず。此御神は延喜の御宇の式とかやいへるふみにも、御名はありていちじるきを、ともすれば呉竹のすぐなる御代に似げなく、人のいひ誤れるふしのまじり行もいとくかたはらいたくなむ有ける。かゝれば物かはりほしうつり、玉川の流の末には布晒せし里は爰になどあらぬ所にて、打出の浜のうちいでていはばいかがさきいかゝあらむと、此いしづみを建て、かのぬのさらせし里の跡、いく万代も動きなく、人のまどはぬあかしとなしけり。又この河のほとりに住ながら、みなかみしらで過ぬるもくちおしくて、いにしとし尋ゆき見つるに

苔の露いはねのしつく落つもり

なかれてきよき多麻河のみつ

ときは弘化三とせといふとしのきさらぎ十日あまりひと日、おなじ里にぬのさらす 小林信継誌

とある。弘化三年といえは西暦一八四六年であり、そのころこのような自覚のもとに建碑が行われたことは注目される。なお、この社の縁起によれば、桓武天皇の延暦十八年に木綿の実が始めて渡って来たが人々はそれから布を作ることを知らず、多摩川べりに住む広福長者という者から方術を得てはじめて作ることが出来たと言われる。これがわが国における木綿のはじまりであり、調布の里の名もここから起ったと言われている。なお、布田(調布市)という地名は京王電車の布田駅となって残っているがこの附近はそのかみの布田五宿の地であった。五宿というのは、上布田、下布田、上石原、下石原、国領を総称していうのである。布田、石原につづいて府中駅の東に染屋(府中市上染屋、下染屋)という所がある。多摩川の調布を織ったのが布田で、その布を染めたのが染屋の地であったと言われる。この地からは調布を搗いたであろうと言われる白が発掘されたと伝えられている。そういえば、それよりやや下流に砧きぬたの地があり世田谷区砧町に名ごりをとどめている。(砧は槌で布を打ちやわらげるに用いる木または石の台。衣板の約)

「江戸名所図絵」(日本図絵全集)には

「……万葉集多磨を多麻に作り、布田も又布多とす。往古麻の布を多く産せしにより、仮名にはあれど其意を含みて麻には作るならん歟。当国の府は、此地より西南にありて其間遠からず。古しへ毎国、朝廷へ調布を貢せし事国史等に詳なり。風土記多麻川の条下に、里人調布を作り内蔵寮くらに納とあり、然れば此国より貢奉る処の調布は、当国に産するものを集めて、此川辺にて晒し、しかして府に携へ、国司の許へ出せしなるべし。依、多麻川の水流を考ふるに、府中の辺より水源は、河瀬狭くして巨石多く、布田より下流は漸海に近きが故に、潮の盈虚ありて調布

に便りよろしからず、たゞ此布田の辺のみ河瀬の広狭水流の溜々たる、実に布をさらすによろしと思はる。故に合せ考ふれば、此辺其実跡なるべからん……」

と述べ、さらに毎年三月のころから七八月に至るまでの間に附近の童児の歌い踊り歩く行事があるとして、

「此川の流れのすゑはどこまで
布を流さば海まで」

「あの子はヤレ

紅屋の子ヤレ

いつもかはらぬ紅絞り

さらし手ぬぐひいつ染めた

さむい瀬に

つくもさらすも

皆おわかしゆが見たさに

御若衆おわかしゆが見たいまゝとて

春の月夜を思ひそよ」

「鎌倉の鶴が二三羽

まい日いちひにち通ひやる

山超えて

山を越えて

こゝな川瀬に何の用

さらしあげた

うつくしき布と

おわかしゆ見たさに”

というような歌詞を紹介し「此唄ひもの、其古をおもひあはするに足れり」としている。

これらの歌謡は万葉の「多摩川にさらすてづくり」の歌に源を發すると考えることも出来よう。いずれにしても、このあたりが万葉のいにしえから「布さらし」の地として名高かったことだけは間違いない。そうして、その生業が美くしい風物誌として人々の詩情をそそったであろうことも否めない事実であったと言っている。

布田の近くに狛江町（北多摩郡）がある。この地は和名抄の多摩郡のところにある「古万衣」の地であり高麗人の居住地であった。元正天皇の霊龜二年（七一六）に駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野七カ国の高麗人千七百九十九人を武蔵国に移して高麗郡を置かれたことが続日本紀に出ている。それに先立つこと十三年、従五位下高麗王若光に「賜王姓」と出ている。若光の墓石は埼玉県入間郡毛呂山町（旧高麗村）毛呂本郷の聖天院に残っており高麗神社にも祀られてい。高麗人の一部が多摩川の下流に住んでその特技である布さらしの仕事をした名ごりが狛江となつていたのであろう。狛江町に駒井の地があるがその駒も高麗の転化したものと考えられる。西から東へ流れる多摩の流れは狛江町和泉の地で大きなカーブをえがいて南へ屈曲する。そうしてそこには崖が突出している。今なお残る松林からははるかに富士が望まれ眺めもきわめてよい。このような風光にめぐまれた川のほとりでさらさらと布をさ

らす乙女達の姿は思うだにすがすがしいものがある。「さらすてづくり」の地をここ和泉のあたりとするのは最も当
つていよう。

「多摩川にさらすてづくり」の歌碑が、この地に建てられたのも故なしとしない。

さて、その碑は北多摩郡狛江町和泉六二四、三好氏方の庭内に建っている。高さ二・七三メートル、幅一・三六メ
ートル、厚さ三九センチの巨碑で万葉歌碑の中で王者の風格を持っている、

多摩河泊爾左良須

亘豆久利佐良左良

爾奈仁曾許能見能

己許太可奈之伎

と万葉仮名で四行に刻まれている。書は白河楽翁・松平定信である。その碑陰には、

「玉川碑陰記 白河広瀬典誤 同藩大家桂書

水名玉川天下凡六在武州為其一而水道屢移問而莫得平井堇威考索旧蹟有年近者認之請我老公書其古歌
一首以勒碑樹之於多摩郡猪方林而後古蹟屹然与貞石共立世夫顯微闡幽春秋之志堇威其蓋学此乎況老公之信
貽証于後世而有余也而以爲表乎

文化二年乙丑十二月」

とあり、さらに、

「武蔵玉川の地古より苧麻蠶絲に富む。里人之を織り玉川に晒して朝廷に献納す。是れ万葉集に玉川に晒す手作の
歌ある所以なり。文化の初、松平楽翁公里人の請により万葉集の歌を書して碑を建てしめたるに、文政十二年の洪

水に河堤壞決して之を失ひしより今方に百年に及べり。狛江の里人石井扇吉、石井正義、羽場順承等之を惜み、数次発掘を試みたれども遂に得ること能はず、因て玉川史蹟猶興会を起し、旧碑の拓本を摸刻し、以て此地を顕彰せんとする。余が楽翁公に私淑し、又名勝保存の志あるを以て、援助を請ひ、且事由を碑陰に記さしむ。願ふに玉川の地万葉の時には東鄙の一水郷のみ。然るに皇都の東京に奠められしより、輦轂に近邇するを以て、冠帽裾履、常に山紫水明と相映ず。今又貞石を建て、近く名相の芳躅を伝へ、遠く奈良朝の古風を追懐せんとす。是亦昭代の恩徳ならずや。此地を過ぎて此碑を覽る者希くは感発する所あれ。

大正十一年十二月二十七日

正三位勲一等子爵 渋沢栄一撰并書

とある。

これによって、この碑は文化二年（一八〇五）楽翁の揮毫を得て多摩郡の猪方村に建てられたものであり、文政十二年（一八二九）の洪水で流されたため大正十一年（一九二二）十二月、旧碑の拓本から摸刻して現在の地に再建したものであることが知られる。

白河楽翁は藩政にも幕政にも大きな業績を残しているが「花月草紙」「退閑雑記」「集古十種」等の著述もあり家集に「三草集」があるくらいである。万葉調歌人として有名な田安宗武の三男であるのもうなづかれる。文化六年には和学講談所所蔵の「元暦校本万葉集」摸写本を細字で書写しているが万葉集に対する関心のほどが知られる。この碑が万葉歌碑中、王者の貫録をもっているのも当然と言うべきである。

なお、前記の碑陰文の中に「水名玉川天下凡六」とある六玉川とは山城・摂津吹田附近、紀伊高野山奥の院、近江の野路、陸前野田、および武蔵多摩川の六カ所を言う。

武蔵多摩川は、西多摩郡雲取山の奥、雁坂峠の東南から流れ出て、上流は市の瀬川あるいは丹波川と呼ばれ、東に向って流れ、武蔵に入ったところで大菩薩峠から流れ出て来る小管川と合流し、さらに進んで日原川、秋川、浅川を合せ、羽田弁天岬で海に注ぐ。末流を六郷川と言う。

多摩の名は、西から東へ流れる靈妙な川という意味で靈川たまと呼ばれるが、とも言われるが、また上流の丹波山地方から出ているとも言われる。延喜式には「多麻」「多摩」とあり仁明紀には「多磨」「多摩」と併用されているが、和名抄には「太婆」と訓じられている。万葉集中には「たま」の用例は二例あり、一例は卷二十の「多麻乃余許夜麻」(四四一七)で、いずれも「多麻」となっている。

このようなことから考えてみるに、「たま川」は「たば川」と呼ばれていたこともあったかも知れない。

「江戸名所図絵」には

「この川は武甲の境丹波山に発し、多摩郡の丹波村に添うて流るるが故に多波川と云ひたるなり。当国多摩郡に入りては日原川も合流す。御嶽山の麓を経て、青梅の南に添ひ羽村及び福生拝島等の地に至る。又此の地にて秋川の流も落合ひ又石田と云ふに至りて浅井川も合し和泉村中島村等の地より末は多摩、荏原、橘樹、三郡の間を東流し海に会せり橘樹郡の方は登戸、二子、小杉、平間、川崎、等の地に添ひ、荏原郡の方は瀬田、等々力、下丸子、矢口、八幡塚羽田等の地に添ひて流れたり。甲州国境より当国多摩羽村まで十余里、羽村より六郷まで十六里と云ふ。武蔵地名考に周流する事凡四十里とあるは水源よりの行程なるべし。」

とある。

なお、多摩川上流の山系の中央を南北に横ざる雁坂峠は、甲斐国志に日本武尊がご東征のみぎり此所を越えて甲斐

から武蔵に入り給うた、と伝えられ、甲武国境の通路として古代から交通のあったことが知られる。相模方面との交通は所々に渡船場があったであろうが、古代の主要な渡し場は、東海官道の通路にあたる丸子の渡しと、府中から原町田へ出る道にあたる関戸の渡しとであったと言われている。

「手づくり」（亘豆久利）とはホームズパンに相当する手織りの布である。倭名類聚鈔に「唐式云、白絲布、今案、俗用ニ手作布三字、云ニ天豆久利乃沼乃、是乎」とあり、新撰字鏡には「紵、亘豆久利」とある。そうして、その材料が麻であることは前にもふれたが、そのことは、

藤原の宇合うまかいの大夫の、任を遷さえて京に

上りし時、常陸の娘子の贈れる歌一首

庭に立つ麻手刈り干し布曝す東女を忘れ賜ふな（巻四、五二二）

によっても分るし、「あづまをみな」がその布を河水につけてさらす業をやっていたことはこの歌によっても知られる。また、有名な竹取翁の歌にも

……うつ麻そやし 麻績をみの児等 あり衣ぎぬの 宝の子等が 打つ栲たぐは へて織る布 日曝しの 麻紵あさてつくろを……
：（巻十六、三七九一）

とあり、古代にあっては麻を刈りとり、皮をはぎ水にひたし、打ちたたいて繊維とし、日に曝し機で織ってから川の水に晒して白く仕上げたものと思われる。巻七の譬喩歌には、

かにかくに人はいふとも織りつがむわが織物はたものの白麻衣しろあさごころも（巻七、一二九八）

橘の島にし居れば河遠み曝さらさず縫ぬいひしわが下衣したごころも（巻七、一三二五）

とあり、川の水で白くさらしたことが知られるが、多摩川の水質や流れの速さとかはとくに布晒しによく適していた

のであろう。なお、晒しの季節は日光のうつくしい新緑の初夏の頃であった。川の水でさらした布を沿岸の木の葉、草の葉の上に広げてかわかすのである。そうすれば太陽光線と葉緑素（クロロフィル）とが化学反応をおこして布は真白に仕上がるのである。古人はそのことを経験によって知っていたものと思われる。

「多摩川にさらすてづくりさらさら」までは「何ぞこの児のここだかなき」を言い出すための序詞ともなっている。「さらさら」は手作りをさらす時の擬音であり、さらにさらという下句の副詞へのかけ言葉となっていて考えられる。多摩川の清流で布さらしに従事している乙女に対して、お前がどうしてこんなにまでさらにさらに恋しくてたまらないのだろうか、と恋心を訴えた歌であるが、あたりの緑、清冽な流れに躍る白い布、これらが、いかにもさわやかな視覚的效果をあげることに成功している、と同時に、「さらすてづくりさらさら」と「さ」の音をくりかえし、「このこのここだ」と「こ」の音を同じようにくりかえすことによって音楽的效果をも發揮している。それだけではない。紅だすきでもかけた乙女らが布をさらしながらきれいな声で唄をうたう光景を思い浮べればこの歌の演出効果は満点となるであろう。

このような名歌が後世に影響を与えない筈はない。はたせるかな、「拾遺集」巻十四には、

玉川に晒す手作りさらさらに昔の人の恋しきやなぞ（詠人しらず）

として出ているし、内裏名所百首（建保三年）には、

てつくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里（定家）

たま河にさらす手つくりさらしにたのむ日影のあはれ過ぎ行く（家隆）
とある。

この外、多摩川を詠んだ古歌はかなりあるようである。

見渡せば浪のしがらみかけてけり卯の花咲ける玉川の里（後拾遺集）

松が音きくだに秋はさびしきに衣うつなり玉川の里（前関白）

今日よりは波にをりはへ夏ころもほすや垣根の玉川のさと（ク）

玉川の里と聞きしやこれならむ月影さらす八重の卯の花（慈鎮）

日にみがき風にみがける光からのどかに澄める玉川の里（順徳院）

近世の歌人のものとしては、

むさしねに雲をさまりてさぐれ石も月にみがける玉川の水（加藤千蔭）

玉川や千むらいほむら手つくりをさらしそふると見ゆる月かな（ク）

白玉の たまの横山 駒並べて 今日こえ来れば、霞立つ 野の辺はるけし 水とく

川とほ白し かぎろひの 春日おもしろく てれる玉川（村田春郷）

玉川の流れば年の内ながら春たちけりな霞む海づら（太田南畝）

また、所作事（清元節）に「調^{てつくりの}布玉川」がある。福森喜高助作詞、二代目見崎喜総治作曲、藤間勘十郎振附けのもので、文化十四年三月に江戸中村座で所演された。

これらの作品が、いずれも万葉集東歌の「多摩川にさらす手づくり」の歌にその源流を仰いでいることはここに改めて述べるまでもあるまい。